

日米大学生による英語と日本語の Virtual Exchange 型会話練習

正 路 真 一

Virtual Exchange Project of English-Japanese Conversation Practice by Japanese and American University Students

SHOJI Shinichi

〈Abstract〉

The present paper reports a Virtual Exchange activity conducted with students from two U.S. universities and three Japanese universities, including Mie University. The American students were enrolled in Japanese language classes in their schools and assigned to participate in this activity. The Japanese students were those who were interested in learning English, and their participations were voluntary. The students met on ZOOM as pairs and made conversations both in Japanese and in English in order for them to practice their target languages. Five students from Mie University participated in the online conversation meetings three times in October, November, and December. Post-activity questionnaires given to the five Mie University students indicated that they enjoyed the interactions with native English speakers, learned language-related knowledges, and motivated to participate in another exchange activities in future.

キーワード：Virtual Exchange、英語、日本語、語学

1. はじめに

2020年初頭に始まる日本でのコロナ禍の拡大以降、ICTの技術を用いたVirtual Exchange および COIL 型の国際教習が盛んに行われるようになった。こうしたオンラインでの交流活動が最も効果的である分野が外国語学習や異文化理解などを目的とした国際交流で、その有効性はコロナ禍以前より報告されている（池田 2016, 小玉 2018）。外国語習得の上では、その言語を母語として話す話者との交流が有効であることは異論のないところであると思われるが、そうした機会を得る手段としては海外留学やワーキングホリデーなどがあり、日本ではそうした「国外における国際化（Internationalization Abroad; IA）」が長く重視されてきた。一方、ICTの発展は、日本国内にしながら画面上で学習言語の母語話者と交流することを可能とし、これによる「国内における国際化（Internationalization at Home; IaH）」の取り組みがコロナ禍の時代に入って急速に拡大

している (池田 2021)。ただしオンライン交流活動などの IaH は、実際の海外留学などの IA と対立するものではない。IaH は海外に出ることができない学生のためのものであると同時に、海外留学に踏み切れない学生の背中を押すものでもあり、また海外留学を決心している学生の語学的・心理的なレディネスを涵養するものでもある (池田 2021)。

本稿は、上記 IaH に基づく取り組みとして、三重大学、山口東京理科大学、成城大学に所属する日本人学生とバージニア大学およびミネソタ大学に所属する米国の学生が、お互いの学習言語である英語と日本語で Zoom を通じて会話するという語学上の上達と慣れを目的とした交流活動を報告するものである。オンライン上での交流活動は Collaborative Online International Learning (COIL) がよく知られているが、厳密に言えば、COIL は Virtual Exchange (VE) と呼ばれる活動の一形態である。端的には (筆者の理解では)、ICT 技術を用いた遠隔交流は全て VE の範疇に入るが、二つ以上の高等教育機関のそれぞれの開講科目の受講者が、その科目において課された活動として交流するものを COIL と呼ぶ (国際教育研究コンソーシアム 2020)。また COIL 発祥の地であるニューヨーク州立大 (2019) の Faculty Guide for COIL Course Development (version 1.5) には、その冒頭の “What is COIL?” の項において “Our method links a class at a U.S. institution with one at a college or university abroad. Courses are co-equal and team-taught by educators who collaborate to develop a shared syllabus that emphasizes experiential and collaborative student-centered learning (筆者訳：この手法は米国大学の科目と国外大学の科目とを連携する。これらの科目はお互いの教育機関において対応するレベルにあり、また学期中に開講されているものである。それぞれの科目の教員が協力して、実体験および協働に基づく学生自身による学びに重きを置いたシラバスを作成する。)” と記されている。これらの説明に拠ると、本稿で報告する活動は、米国大学の学生にとっては科目内活動であるが日本の大学の学生にとっては科目内活動ではないため COIL には当たらない。日本からの参加者は特定の科目の受講者ではなく、自身の興味や学習意欲をもとに参加したものである。時として COIL と VE の境界線は曖昧であり、科目に縛られない活動をも COIL と呼ぶことがあるようであるが、そうした境界線の曖昧さが妥当であるかどうか筆者には判断がつかないので、本稿で報告する活動は、より厳格な定義に従って VE と呼ぶことにする。

2. VE 会話練習の取り組み

本稿で報告する VE の取り組みは英語学習に興味のある日本の大学生と日本語学習者である米国の大学生がオンライン上で英語と日本語の会話を練習するものであるが、これは

数年前から山陽小野田市立山口東京理科大学（以下山口東京理科大学）、成城大学、そして米国のバージニア大学、ミネソタ大学の間で実施されていたものであった。ただ近年米国側の参加学生の数が増えたことにより、筆者と旧知のバージニア大学の担当教員が本学の学生の参加を提案してきたものである。これにより、2021 年度後期（米国においては秋学期）においては、日本側は山口東京理科大学、成城大学、三重大学の日本人学生が、そして米国側は従来通りバージニア大学とミネソタ大学の学生が参加して、VE 会話練習が実施された。

活動内容の概要としては、米国大学の学生と日本の大学生を含む 2~4 名のグループが、各グループ内で Zoom を使って顔を合わせ、英語と日本語で会話をする。一回の会話時間は約 40 分で、20 分間日本語、20 分間英語で会話することになっているが、それぞれの学生の語学能力や話の盛り上がりによって、各回の会話時間や日英語使用の割合は、概ね学生たちに任されている。また、この取り組みは、本質的にはバージニア大学とミネソタ大学の日本語科目受講者への課題として実施されるものであるが、これらの米国大学生が受講する科目は複数種類あり、それぞれの科目に応じて課される会話練習の回数が異なる。具体的には、ある科目の受講生は 3 回の会話を、また別の科目の受講生は 7 回の会話を課される。そして日本側の参加学生は、自分のグループメンバーである米国人大学の受講科目に合わせて会話の回数が決まる。

参加学生の募集についてであるが、指定の日本語科目を受講している米国大学の学生には必須課題として課されるので、その科目を履修した米国大学生の数に合わせて日本人学生が募集される。今回（米国の 2021 年秋学期）、本取り組みに参加する米国大学生はバージニア大学から 49 名とミネソタ大学から 28 名の、合計 77 名であった。そして、77 名の米国大学生のうち 14 名は 3 回、残りの 63 名は 7 回の会話練習を課された。またこの 77 名のうち、二人グループで会話練習に参加することを課された学生、または三人グループや四人グループでの参加を課された学生もいたので、その数に合わせた結果、46 名の日本人学生が募集されることとなった。三重大学は今回が初参加ということもあり、5 名の日本人学生を募集することとなった。そして成城大学からは 1 名、残りの 40 名を山口東京理科大学が募集した。ただし山口東京理科大学の 40 名のうち 3 名は当該大学の担当教員の既知の社会人、そして 1 名は教員となった。こうして、米国大学生の参加者に合わせて、日本側は 46 名の日本人学生（および社会人と教員）を揃えた。

前述の通り、三重大学はこの VE 会話練習に今回初めて参加するものであり、どのくらいの参加希望学生が現れるか予測できなかった。そのため三重大学からは 5 名のみ募集、そしてその 5 名は 3 回だけの会話練習を課された米国大学生に割り当てられることとした。

筆者にとって今回の参加は、どの程度の数の三重大学生がこうしたオンライン国際交流に参加意欲を持って参加を申し出るか、また参加学生たちはこの会話練習に楽しんで取り組めたか、そして学生たちの学びとなったかなどを把握するためのもので、それにより今後継続して参加するかどうかを判断するためのトライアルであった。三重大学からの 5 名の参加学生の募集にあたっては、筆者が担当する本学国際交流センター開講科目(教養教育院開講科目)「三重の社会と文化(三重大)」を受講したことのある日本人学生を対象とした。この科目は授業内言語が英語であり、また日本人学生と外国人留学生の両方が受講しており、日本人学生と外国人留学生の協働活動を取り入れていることから、英語母語話者との交流に積極的な学生が比較的多いと判断し、この科目の受講経験者から VE 会話練習への参加を募ることにした。ただし米国大学の秋学期は八月に開始され、米国側の受講者数(この VE 活動参加者数)が決定するのが履修修正期間を経た九月初頭になった。それを受けて、筆者は本学の夏休み中の九月上旬に、2021 年前期までの「三重の社会と文化」受講者を対象にメールを送って募集した。従って、前述の通り、日本人学生にとってはこの会話練習への参加は本学での受講科目の課題というわけではなく(つまり COIL ではなく)、あくまでもカリキュラム外の VE 活動である。募集メールは総計 41 名の三重大学生性に送り、メールを送った翌日から翌々日にかけて 5 名の参加希望者から連絡があった。またその数日後さらに 1 名の学生から参加希望の連絡があったが、この学生はキャンセル待ちリストに入った。結局、募集メールを送付した 41 名中参加希望者が 6 名であったので、今回の募集人数を 5 名と設定したのは妥当であったと思われるが、今後も本学がこの VE 活動に参加するなら、募集人数を増やすかどうかについては検討を要する。計算上は、募集メールを送付する学生数を 80 名ほどに拡大すれば 10 名程度の参加を確保できると予想される。

本学の学生が VE 会話練習の相手として割り当てられたのは全てバージニア大学の学生で、全て日本人学生一人と米国大学生一人からなる二人グループであり、また(前述の通り)全て 3 回のみ会話練習を課された。その 3 回の会話練習の時期は、第一回目が 10 月 30 日～31 日の週末の中の 40 分、第二回目が 11 月 20 日～21 日の週末の中の 40 分、そして第三回目は 12 月 4 日～5 日の週末の中の 40 分とスケジュールされていた。その第一回目の前に、米国大学生からそれぞれの会話の相手となる日本人学生にメールが送られて、上記の週末のうちどの日の何時から会話を開始するかを学生どうしで相談した。この段階において、本学学生の一人から筆者に「相手の米国大学生から、1 週間前になっても連絡が来ない」という問い合わせがあった。こちらは筆者がバージニア大学の担当教員に連絡し、相手の米国大学生に本学学生へのメール送付を促してもらって解決した。また別の一

人の本学学生から、「相手の米国大学生からメールが来たが、『じゃあこの時間でいいですか』と返信したところ、それに対する返事がない」という連絡があった。こちらも筆者からバージニア大学教員に問い合わせたところ、先方の学生が返事を忘れていたとのことだったので、返信を促し、解決した。こうして、5名全ての本学学生が、それぞれの相手の米国大学生と時間を決め、Zoom リンクを米国大学生が作成し、第一回目の会話に臨んだ。

第1回目の会話練習が行われた10月30日～31日の週末明けの月曜日に、筆者から三重大大学の参加者5名に、無事会話練習を終えられたか確認するメールを送った。2名の参加者から無事終了との返信があり、1名からは週末ではなく月曜日にするようになったとの返信があり、残りの2名からは返信がなかった。前述の通りこれは授業の課題ではないので、筆者はこの2名に再度確認メールを送ることを控えた。また、2回目の会話練習と3回目の会話練習の間、11月29日にも、筆者から三重大大学の参加者5名に、無事2回目の会話練習を終えられたか確認するメールを送った。1名の学生から無事終了されたという返信があったが、他の学生からは返信がなかった。12月7日に、筆者から三重大大学の参加者5名に、3回目の会話練習を終えられたかを確認するメールを送ったが、2日以内に、5名の学生全員から無事終了されたという返信があった。

3. アンケート調査

会話練習に参加した三重大学生5名に、第1回目の練習の前に事前アンケートを、第3回目の練習の後に事後アンケートに回答してもらった。その結果をこの章に示す。

3.1 事前アンケート

第1回目の会話練習を開始する前週に実施した事前アンケートの質問と回答を下の表にまとめる。

表1 事前アンケートの質問と回答（原文ママ）

質問1：今のあなたの英語能力はどの程度ですか（例：TOEIC 645点、英検2級、GTEC 900点、など）。
学生 K.R. 何もありません。 学生 O.Y. TOEIC 795点 学生 K.Y. TOEIC 545点、英検二級、GTEC 900点台（詳細の点数は不明） 学生 M.H. TOEIC 805（IP試験） 学生 O.A. 英検2級
質問2：どうしてこの会話練習に参加しようと思いましたか。
学生 K.R. 外国の方と話す機会がほしいと思っていたから。 学生 O.Y. 先生に勧められて面白そうだったから。

<p>学生 K.Y. 自分の英語能力を高めるため。 学生 M.H. 英会話に興味があったから。 学生 O.A. 留学を目的とした海外渡航もできない今、英語を話す人と関わることでできるいい機会だから。</p>
<p>質問 3: 会話練習に参加することで何を期待していますか。</p>
<p>学生 K.R. 自分の英語力がどこまで通用するのかを知る。 学生 O.Y. 特に日本では学ぶ機会が少ない海外の文化を知りたい。 学生 K.Y. 英語能力を高めること、海外の友達ができること、英会話を通して自分の視野を広げること。 学生 M.H. リスニング力とスピーキング力の向上。 学生 O.A. 自然な流れで英語で会話ができるようになること。国際的な友人関係をつくりたい。</p>
<p>質問 4: 会話練習をするにあたって不安なことはありますか。</p>
<p>学生 K.R. インターネット環境のせいで会話ができないこと。 学生 O.Y. 特にないです。 学生 K.Y. 英語で喋ることに慣れることに時間がかかるかもしれないということ、言葉に詰まるかもしれないということ (でもそのうち何とかなるだろうと思っていてそれほど不安ではないです)。 学生 M.H. 自分の英語力。 学生 O.A. 特にありません。</p>
<p>質問 5: その他コメントがあれば書いてください。</p>
<p>学生 K.R. (無回答) 学生 O.Y. いい機会を用意してくれてありがとうございます。 学生 K.Y. 貴重な機会なので楽しんで有意義に会話練習に取り組みたいと思います。 学生 M.H. (無回答) 学生 O.A. (無回答)</p>

質問 1 は参加学生の英語能力を調べたものであるが、この VE 活動への参加にあたっては特に英語能力を基準として参加の許可を与えたわけではない。学生 TOEIC 795 点の O.Y. と TOEIC IP テスト 805 点の M.H. は、大学生 (学部生) としては平均を大きく上回る英語能力を有していると考えられる (TOEIC の大学生平均スコアは 574 点、TOEIC IP テストの平均スコアは 455 点; IIBC, 2020)。また「何もありません」と回答した学生 K.R. と、英検 2 級を取得している学生 O.A. の回答からは、彼らの英語能力が特に大学生として優れたものであるとは判断できない。しかし、学生 O.A. の回答に書かれた「英検 2 級」が、いつ取得したものか確認しなかったこともあり、現時点での K.R. と O.A. の英語能力は不明であった。また、学生 K.Y. は GTEC 900 点以上と回答したが、どの種類の GTEC を受験したのかを確認しなかったため、こちらも現在の英語能力は不明であった。質問 2、質問 3 からは、これらの学生が英語能力を高めることを目的として、あるいは海外の文化を知ること、海外の友人を作ること、そして自身の視野を広げることを目的とし

てこの VE 会話練習に参加したことが示されている。また質問 4 では、今回の VE 活動参加にあたって、自身の英語能力が米国大学生と会話するに十分なものであるかという心配、またインターネット環境に関する心配が挙げられた。質問 5 に対する回答からは、特に注目すべきものはなかった。

3.2 事後アンケート

第 3 回目の会話練習が終わった次の週に実施した事後アンケートの質問と結果を下に示す。質問が多いので、表 2 と表 3 に分けて記すが、表 2 は主に VE 会話練習の実際の実施過程について聞いたもの、表 3 は振り返りの質問である。

表 2 事後アンケートの質問と結果：会話の過程（原文ママ）

質問 1：会話練習の時間を決めたり、当日オンライン上で会ったりするのはスムーズにできましたか。
学生 K.R. できました。 学生 O.Y. できました。相手の方から連絡をくれる事が多く、空いている日程をいくつか提案してくれたので、二人の都合があう日程を決めることができました。 学生 K.Y. 滞りなくできました。 学生 M.H. はい。 学生 O.A. 一度私側の音声聞こえないことがあったが、それ以外はうまく行きました。
質問 2：会話練習中の相手の態度はどうでしたか（例：好感が持てた、積極的だった、つまらなさそうだった、など）。
学生 K.R. 積極的に話してくれた。 学生 O.Y. お相手は日本に興味があり私はアメリカの文化に興味があったのでお相手の態度に関してはとても好印象でした。 学生 K.Y. 会話しようという説教的な姿勢が伝わってきて自分も意欲が増した。 学生 M.H. とても楽しそうだったと思います。 学生 O.A. 会話が途切れた時でも質問をいってくれたりしてくれ積極的な印象を持てた。
質問 3：英語での会話はスムーズにできましたか。
学生 K.R. できたと思う。 学生 O.Y. できました！わからないことはすぐに聞くのが一番だと思いました。そうすることでスムーズに会話を続け、楽しむ事ができました。 学生 K.Y. 日本語から英語に切り替えるときに英語が出てこないことがありやや苦勞したが、時間が解決した。 学生 M.H. まぁまぁ。 学生 O.A. 時々伝わらないこともあったが、違う表現で伝えようと努力できた。
質問 4：日本語での会話はスムーズにできましたか。
学生 K.R. できました。 学生 O.Y. できました！あらかじめメールでテーマを決めていたのでテーマを決めるのに時間をかけることがなくてよかったです。

学生 K.Y. 相手の日本語がとても聞き取りやすかったのでスムーズだった。

学生 M.H. はい。

学生 O.A. 相手はかなり日本語が話せたのであまり困ることはなかった。

質問 5：英語での会話で、何の話題を話したか、思い出せる限り書いてください。また、特などの話題が一番盛り上がりましたか。

学生 K.R. お正月に何を食べるかという話題。

学生 O.Y. 特に文化について話しました。(クリスマスに何をやるかなど、)特に盛り上がった話題は、お互いの国に旅行するならどこがお勧めかを教えてくれた事です。アメリカに住んでいるケビンさんならではのアドバイスが聞いて面白かったです。

学生 K.Y. アメリカの音楽の流行り、部活やスポーツはしていたか、アメリカのスラッグについて、好きな音楽アーティスト、好物は初めに食べるか最後に食べるか、今日は何をしていたか、お互いのペットについて、アウトドア派かインドア派か、ごはんとパンはどちらが好きか、好きな授業はなにか、大学の食堂について。

学生 M.H. 大学での生活、アルバイト。

学生 O.A. 今週末の予定やしたこと、シェアハウスの様子・困ること、アルバイト、感謝祭などの国の祝日の違い、ブラックフライデーで買ったもの、大学、お寿司、インターンシップ、就職、話せる・学んでいる言語。特に盛り上がったのはインターンシップ、就職のことだと思う。

質問 6：日本語での会話で、何の話題を話したか、思い出せる限り書いてください。また、特などの話題が一番盛り上がりましたか。

学生 K.R. 日本とアメリカの違い。(桜と栗の話)

学生 O.Y. こちらも文化について話す事が多かったです。上の質問の答えと似ていますが、お互いの国に行くならどうというプランでいくかを話し合ったことが印象的でした。(1 日目は東京に行って、2 つかめは大阪で…など)

学生 K.Y. アメリカは今寒いのか、雪は降っているか。相手の両親が中国の方だったので、中国について。アメリカでおすすめの場所。アメリカに行ったらどこに行きたいか、人が話しているときに相槌を打つことは失礼なのか、休日には何をやるか、日本に来たことはあるか、アメリカには日本のような大学入学試験がないこと、アメリカの大学 1 年生はアルバイトをする暇がないこと。

学生 M.H. アニメ、好きな俳優。

学生 O.A. 今週末の予定やしたこと、シェアハウスの様子・困ること、アルバイト、感謝祭などの国の祝日の違い、ブラックフライデーで買ったもの、大学、お寿司、インターンシップ、就職、話せる・学んでいる言語、学校制度。お寿司の話が一番盛り上がったと思う。

質問 7：一回の会話練習で、平均して英語と日本語での会話時間の割合はどうでしたか (例：英語 35 分、日本語 25 分くらいなど)。

学生 K.R. 日本語 20 分、英語 20 分。

学生 O.Y. 英語 35 分、日本語 30 分。

学生 K.Y. 時間を計ってちょうど半分ずつ会話しました。(筆者注：日本語 20 分、英語 20 分と思われる)

学生 M.H. 分けずに混ぜて話してしまったので、具体的時間がわかりません。

学生 O.A. 1 回目はほとんど日本語（60 分ぐらい）／2 回目英語（30 分）日本語（45 分）／3 回目日本語（40 分ぐらい）英語（20 分ぐらい）

質問 8：自分の英語と相手の日本語では、どちらの方がレベルが高いと感じましたか。

学生 K.R. 相手の日本語。

学生 O.Y. 単語の語彙についてだと私の方がわからなかった単語の数は少なかったと思います。

学生 K.Y. 相手の日本語。

学生 M.H. 相手。

学生 O.A. 相手の日本語。

質問 1 の結果から、ZOOM で会う時間の取り決めやソフトウェアやハードウェアに関するテクニカルな問題は特段なく、概ねスムーズに実施できたと考えられる。質問 2、質問 4、そして質問 8 の結果から、会話の相手の米国大学生が積極的な態度で会話に臨み、また日本語のレベルが高かったので、日本語での会話がスムーズに進んだと推察できる。一方質問 3、質問 8 の結果から、三重大大学の参加学生の中には、英語での会話にはやや苦戦した学生もいたようである（学生 K.Y.、学生 O.A.）。ただし質問 7 から分かるように、特に会話時間の長さが日本語に偏ったということはない。また会話時間は日本語と英語を合わせて約 40 分と定められていたが、それより長く会話をした学生が二人いた（学生 O.Y.、学生 O.A.）。また、質問 5、質問 6 からは、英語でも日本語でも、会話の話題が多岐にわたっていたことが窺える。

次に、前述の通り、表 3 に会話練習全体の振り返りに関する質問と回答の結果をまとめる。

表 3 事後アンケートの質問と結果：振り返り（原文ママ）

質問 9：全体的に振り返って、楽しめましたか。

学生 K.R. 楽しめました。

学生 O.Y. とても楽しめました。

学生 K.Y. 楽しめました。

学生 M.H. はい。

学生 O.A. 最期の会話練習の時に連絡先の交換と連絡を取り合う提案をした。とても楽しめ、また同じようなプログラムがあれば参加したいと思う。

質問 10：全体的に振り返って、自分の英語力向上に役に立ったと思いませんか。もし思ったなら、どのような点について役に立ったと思いますか（例：語彙力、発音、心理的に英語ネイティブ話者と話すことに慣れた、など）。

学生 K.R. ネイティブと話すことになれた。

学生 O.Y. 英会話の向上には場数を踏むことが欠かせないということを聞いたので今回参加させていただきましたが、それ以前に会話自体を楽しむ事ができた経験がよかったです。また、お互い言語を勉強している途中なので失敗を恐れずに話すことができたので、語彙の向上というよりは、会話の楽しさを改めて実感することができました。

学生 K.Y. 発音、聞き取り、今後の意欲につながる、など。 学生 M.H. はい。英語での表現の仕方を学んだ。 学生 O.A. 役だったと思う。たとえ伝わらなくても、焦らず他の表現と翻訳の機器を用いながら伝えることができた。また、私自身がわからないときにももう一度聞いてみることもできた。ネイティブと話す時に緊張してしまうが自分の意見を伝えよう、文法が間違っても伝えてみようと思うようになった。
質問 11：全体的に振り返って、参加前に自分が期待していたことが満たされたと思いますか。
学生 K.R. もう少し英語で話したかった。 学生 O.Y. (無回答) 学生 K.Y. おおむね満たされた。 学生 M.H. はい。 学生 O.A. 自分の友だちの幅を広げ、インターナショナルな環境、学習機会、出会いをしたいと思っていたのでとてもよかったです。
質問 12：全体的に振り返って、参加前に自分が不安に思っていたことが的中してしまったと思いますか。
学生 K.R. いいえ。 学生 O.Y. (無回答) 学生 K.Y. 思わない。 学生 M.H. いいえ。 学生 O.A. 第一回目は大成功とは言えなかったが、回数を重ねていったことで不安は消えた。
質問 13：今後このような取り組みをするにあたって、参加学生や企画者(教員)が注意しておくべきと思う点がありましたか。
学生 K.R. 時間が限られているので全力で楽しむこと。 学生 O.Y. とても楽しくてためになるプログラムに参加させていただき本当に感謝します。トークの内容は生徒たちに任せてもいいとは思いますが、万が一生徒同士のコミュニケーションがうまく取れず、トークテーマが決まらないということを想定して、会話が始まってから決めるのではなく、『あらかじめ決めておくともスムーズになるよ』と言っておくとも会話がよりスムーズに開始するのではないのでしょうか。 学生 K.Y. 事前に何を話すか、話題を考えてから取り組んだ方が時間のロスが少ない。 学生 M.H. ない。 学生 O.A. 自由に話せるのでグループにより個性が出ていいと思う。また、日常生活でも友だちとは話題が決まっているわけではないので、より日常生活に近い会話ができたと感じる。
質問 14：その他コメントがあれば書いてください。
学生 K.R. (無回答) 学生 O.Y. (無回答) 学生 K.Y. とても楽しかったです。相手の日本語が流暢で、いい刺激をもらいました。またこのような機会があれば参加したいです。 学生 M.H. (無回答) 学生 O.A. また同じようなプログラムがあれば参加したいと考えます。

まず質問 9、質問 11、質問 12 について、三重大大学の参加学生全員が、この VE 会話練習を楽しむことができ、満足し、事前アンケートに書かれたような不安は不要であったと回答した。また質問 10 の結果から、参加学生全員が、この VE 会話練習が自身の英語能力向上に役立ったと考えており、具体的には、英語母語話者との会話に対する慣れ、英語での会話の楽しさ、英語学習や英語での会話に対する意欲の増進などの心理的な効果が多く挙げられるとともに（学生 K.R.、学生 O.Y.、学生 M.H.、学生 O.A.）、発音、聞き取り能力、英語表現などの語学学習上の効果を挙げる学生もいた（学生 M.H.、学生 K.Y.）。

質問 13 は、今後同様の取り組みを実施するにあたっての注意点等を聴取したものであるが、二人の学生が「あらかじめ話題を考えておいた方が良い」とする一方、一人の学生からは「あらかじめ話題を決めていない方がより日常会話に近い会話ができる」と回答している。質問 14 の自由記述コメントに関しては、二人の学生（学生 K.Y.、学生 O.A.）が、今後同様の取り組みがあれば参加したい旨を記している。さらに学生 O.Y.と学生 M.H.も、このアンケートを添付して提出したメールの本文の中に、今後同じような機会があれば連絡が欲しいと書いている。

4. まとめと結語

本稿は、日本人学生と米国大学の学生が、それぞれ英語と日本語の能力の上達を目的とし、Zoom での会話を行った VE 活動を紹介し、またこの活動が三重大大学の参加学生に与えた感想および効果を報告したものである。参加学生に対するアンケート調査の結果、学生たちがこの VE 活動を楽しみ、英語学習についての心理的または語学的効果を得られたことが示唆された。また、学生 S.R.は、最初の指示通り各回につき日本語 20 分、英語 20 分の会話をしたようであるが、「もう少し英語で話したかった」と感想を記していることから（質問 11）、三回の会話練習だけでは物足りなかったと感じているようである。一方学生 O.A.は、会話の相手の米国大学生と連絡先を交換し、今後も連絡を取り合うことを提案していることから（質問 9）、今回の取り組みが個人的な交流関係を築くきっかけになった可能性がある。

今回、この VE 活動に三重大学生が参加したのは初めてであったことは前述の通りであるが、参加学生の声により、今後も継続して参加する価値があると判断する。まずは来年度、三重大学からの参加学生枠を 10 名に増やし、さらに将来的には会話練習回数が 7 回のグループに振り分けてもらうことも視野に入れたい。

参考文献

池田佳子 (2016) 「「バーチャル型国際教育」は有効かー日本で COIL (Collaborative Online International Learning) を遂行した場合」『国際交流』vol.67, 1-11.

池田佳子 (2020) 「ICT を活用し海外の学生と行う国際連携型の協働学習「COIL」の教育効果と課題」『大学教育と情報』vol.171, pp.20-25.

国際教育研究コンソーシアム (2020) 「第 3 回国際教育のスピリットを取り込もう! Virtual Exchange (COIL) を超短期間でも取り込む手法ワークショップ<報告> 池田教授による日本語版解説」(<http://recsie.or.jp/wp-content/uploads/2020/05/8602954c088550321db1ae29de894d4f.pdf>)

SUNY COIL (2019) Center Faculty guide for COIL course development (version 1.5) (http://www.ufic.ufl.edu/uap/forms/coil_guide.pdf)

IiBC 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (2020) 「TOEIC® Program DATA & ANALYSIS 2020」(https://www.iibc-global.org/library/default/toEIC/official_data/pdf/DAA.pdf)